

【接待】

「接待」という言葉は、仏教の習慣から来た言葉です。

新暦で八月のお盆の後、二百十日と秋の彼岸の入りのあいだころまでの残暑厳しい時期に、亡き人の供養のため、家の門の前で道行く人々に白湯やお茶を無償で振る舞い、施しとしたことを「門茶」といい、また「接待茶」とも言いました。

四国の巡礼地に行きますと、お寺やその道筋では今でもこの習慣が大切に続けられています。お茶やお菓子などの食べ物だけでなく、咳込んでいればのど飴、怪我をすれば絆創膏と、その心遣いには感動で胸があつくなることもあります。

江戸時代中期以降から明治の中頃までの街道筋には、特に困った人や馬に、水や食料・餌などを施して救護することを目的として「接待茶屋」が設けられ、多くはその土地の資産家によって、ボランティアで運営されていました。

東海道では戦後まで続いた箱根峠近くの「三島接待茶屋」、中山道では復元された和田峠の接待茶屋などが知られています。

これらの「接待」は、見返りを求めない施しの精神の上に成り立っています。

困っている人がいれば手を差し伸べるのは日本に限ったことではありません。海外には、日本の巡礼のように聖地を廻るものもあると聞きます。海外の旅行先で助けられたという方もおられることでしょう。

それこそお釈迦さまの時代から、道を行く人々はその先々でさまざまな施しを受けたり助けられたり、その中でいろいろなご縁を頂いて来たことでしょう。

さて、振り返って現在一般的に使われている「接待」という言葉はどうでしょうか。一緒にゴルフをしてご馳走を振る舞って、ご縁ができて深まってお得意様と親しくなればそれで良いはずですが、何らかの見返りを期待してしまうのが私たち人間の欲の深さなのかもしれません。

これについてお釈迦さまは、こうお示しになっています。

「今のひとびとは自分の利益のために交わりを結び、また他人に奉仕する。

今日、利益をめざさない友は、得がたい。

自分の利益のみを知る人間は、汚れている。

『禅のこころ-曹洞宗-』

さい
犀の角のようにただひとり歩め。」

お釈迦さまの時代にも、自分の利益のために他人と関係をつぶ人がいたのです。そしてお釈迦さまは、動物のさい
犀の角のように、ただ一人であっても正しい道を歩みなさいと示されています。

今こそ、このおさとしをいまし
戒めとして、迷いの道を離れる生き方が求められているのではないのでしょうか。

— 終 —